



1月17日のメモリアルデーに合わせて
被災地北海道の先生が、今度は神戸を訪問
(神戸市立こうべ小学校・復興担当教員 中塚和代)



被災地各地では、阪神淡路大震災犠牲者の追悼と復興を願う行事が行われます。私たち神戸の教師も、自分たちの力に合わせて継続した取り組みを続けています。2学期には各学校や教育研究集会で、北海道や三宅島の被災地への支援報告会を行いました。神戸の市民(子どもたち、教師たち)が手さぐりで復興と心のケアに取り組んできた教訓を、新たな災害地の人々に伝え、行政への働きかけに役立ててもらっています。

1月16~18日、次のような交流や活動を行います。

16日 被災地交流と学校訪問

新築になった東灘区の小学校で、防災面からどのような施設・設備がつけられ、用意されているかを見学します。(太陽電池で、停電時の電力確保などの配慮のある施設ができています。)

17日 市民追悼式に参加

被災者への冥福を祈り「命」について考えます。ゲストティーチャーとして、学校に招待し、防災教育行事の一つとして、全校での取り組み、協力していただきます。

被災地「サミット」に参加

教師のできることを、しなければならないこと、みんなと考えなければならない課題などを交流しあいます。

このような交流活動を通して学んだことを、子ども達に返し、心の痛手を少しずつ癒し、乗り越えていくための指導、そのための環境づくりについて、学校現場からの発信に役立てたいと思います。

お知らせ

心のケアに関する研修会(第3回)

時 1月24日(水)

講師 正津房子先生(元児童相談所)

場所 ひょうご福祉ネットワーク
(TEL371-5789)

(神戸市兵庫区下祇園町2-9)

毎月1回行っています。

(詳しくはTEL078/958-0704 中塚まで)

全教神戸では、引き続き被災地と連絡を取りながら、必要な支援活動を行います。皆様のご協力をよろしくお願いします。

お便りとカンパを有難うございました。
明けましておめでとうございます。
皆様の日頃の活躍に敬意を表します。
大震災からの4年経つでしうか？
被災者の方の気持ちを考えると言葉もありません。希望を捨てずにがんばって下さい。
さて遅くなりましたが、私たちのわづかばかりの気持ちを送ります。今年度分の主任手当てです。向寒の折、健康に留意され活躍してください。
(毎年届けてくださる、
神奈川県伊勢原市の方より)

「被災地支援活動のためのカンパ」のお願い

全教神戸市教職員組合書記局

〒振込口座番号01170-7-29732

被災地だより

第17号 2001.1.17

これ以上人災による犠牲者を出さないために
強力な絆を避難所になった神戸の学校現場から全国へ

絆



全教神戸市教職員組合「絆編集係」
神戸市中央区下山手通
4・13・9中尾ビル3F
TEL-078-391-7508
FAX-078-391-8549
〒振込口座番号01170-7-29732

震災6周年特集

6年かかって見えてきたもの

格差の広がる被災地…被災者の生活支援・復興計画の見直しを!!
子ども達に、明日が見える街づくりを!!

震災6周年目を迎え、被災地では、様々なイベント・行事が計画されています。兵庫県、神戸市など、行政は、復興の折り返し点としてこれまで行ってきた様々な被災者支援政策の打ち切りを計画しています。特に神戸市では、震災前から計画していた、都市計画を「被災地再開発事業」という形で、復興計画に重ねて被災者に押し付けてきました。震災後1~2年は同じような状況の中、励ましあってきた人達も、3~4年経つと復興の格差が目立ち、知らないうちに自分達だけが取り残されている…と語っておられます。

6年経っても、仮設店舗の営業、再建の見通しがたたない業者、住宅の二重ローンに苦しむ多くの住民がいるのが被災地の実態です。日本列島が活動期に入ったといわれる今、全国各地で、自然災害が今後ますます増える事が予想されます。災害時の立ち上がり資金として、ますます「実質的な公的支援」を制度化する声が高まっています。

6周年を迎える今、住民の声を生かした根本的な復興計画の見直しを求めて、住民自らが「街づくりの提言」などをまとめる作業が続いています。是非これらの動きに耳を傾け、行政の勇気ある住民本位の政策の見直しが求められます。

目次

- * 心のケアの必要な児童 まだ3400人も・・・(p2)
(兵庫県教育委員会調査結果資料より)
- * 震災の体験も「享受」の授業づくり(数学)の中で生かされて
(神戸市立平野中学校 北河豊治) (p3)
- * 6年経って、息子が神戸の高校を受験、神戸に帰ります。
(当時東灘区在住 北尾美紀子さん) (p4~5)
- * 新連載スタート(第1回)
「神戸では大地震がない」迷信がなぜ広がったか・(p6~7)
科学を学ぶ市民の権利と理科教育(神戸市立飛松中学校 齊本 格)
- * 今度は、被災地北海道の先生が神戸を訪問、その計画・(p8)
(神戸市立こうべ小学校・復興担当教員 中塚和代)



心のケアが必要な子ども達

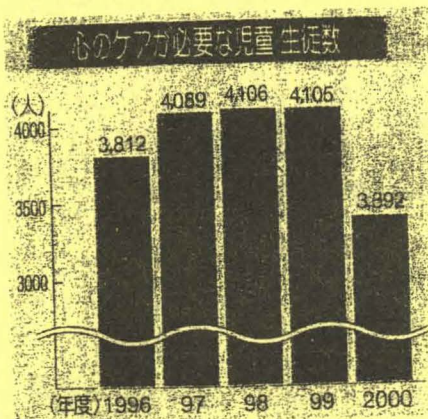
3400 人が症状に現れる。

(2000 年 7 月現在) 兵庫県教育委員会調査結果

阪神・淡路大震災後、兵庫県教育委員会は毎年心のケアの必要な児童の実態調査を行っています。様々な状況変化を経て、5 年を経過した昨年 7 月現在、まだ 3400 人程の子ども達が心のケアが必要という結果が報告されました。(資料 1)

この調査は全県下の公立小中学校に通う児童生徒 49 万人を対象に実施したものです。教師の目で見、心的外傷後ストレス障害(PTSD)の症状が現れている児童、生徒をチェックした結果です。

昨年より全体で 700 人ほど減少していますが、震災時 2 歳未満の幼児だった新一年生が、160 人ほど増え、震災時、小学 1 年生だった子ども達が入学した新中学 1 年生も、400 人程増えています。



その症状が現れる要因別の結果を見ると、改めて、復興への歳月の長さが感じられます。住宅環境の変化による要因は、減少していますが、経済環境の変化による要因が、今までで最も多い率になっていることが気にかかります。県教育委員会によれば、「住宅環境、家庭環境、経済環境の変化などにより、家計悪化、家庭内トラブル、家族構成の変化などからくる二次的ストレスが子どもの心に複雑に影響しているケースが目立っている」と説明しています。昨年 10 月 6 日に起こった鳥取県西部地震の時に、忘れかけていた震災の恐怖が蘇ったと語る児童が多くいました。

ケアを必要とする主な要因 (増加率)					
	①	②	③	④	⑤
2000年度	家族・友人関係の変化 41.9%	震災の恐怖によるストレス 39.4%	住宅環境の変化 37.6%	経済環境の変化 28.2%	学校環境の変化 8.8%
1999年度	震災の恐怖によるストレス 45.9%	住宅環境の変化 44.9%	家族・友人関係の変化 18.0%	通学環境の変化 17.4%	経済環境の変化 15.8%

5 年たっても依然として震災の恐怖によるストレスを抱えている児童が 39.4%もいることがその事実を裏付けているようです。ほとんどの子ども達は、それぞれの家庭環境の複雑な問題を抱えながらも、健気にがんばっているのです。長引く不況、雇用不安の上、様々な復興支援の期限が切られようとする今、復興の格差がますます大きくなっています。家族友人関係の変化による要因が 41.9%と、昨年よりその割合が 2 倍以上増えていること等を考えると、改めて、数字に現れない児童、生徒へのきめの細かい指導、対応が今後も求められます。

震災の体験も

「享受」の授業づくり(数学)の中で生かされて・・・

神戸市立平野中学校 北河豊治

いつも気遣う生徒への思い

私のクラスには、震災当時、長田区の小学校に通っていた男子がいます。兄も 3 年生にいます。震災当時、六甲道で被災した先生が担当する理科の時間、地震の学習をする事になりました。

当時の TV のビデオを見るとお聞きしたので、心配して彼に「見ても大丈夫？」と聞きました。「大丈夫ですよ」と答えてくれたものの、内心は不安でした。

震災の体験がしっかり生きていた
作文に感動

直前の道徳か HR の時間、「未来に希望すること」として作文を書かせた時、彼は、こんな願いを書いてきました。

【僕は小学一年の時、長田区にいて、兵庫県南部地震で震度 7 の災害にあいました。とても怖かった。地震がおさまって外を見ると、一面火で一杯でした。僕のマンションは壊れなかったけど、ガス・電気・水が止まり、とても大変だった。

けど、近所の人達が助けてくれた。また、遠くの地方から来てくれたレスキュー隊の人も助けに来てくれて、神戸の町は、

1 ヶ月ちょっとで落ち着いてきました。みんな、神戸を元の姿に戻そうといういろいろなイベントをしてくれて、今の神戸の町になりました。

僕は、いろいろな人に助けられた感謝は、絶対に忘れてはいけないと思う。それと、助け合いという言葉や気持ちを 21 世紀に生まれてくる子ども達に贈ってほしいと思う。】

この作文には、胸を打たれました。

たまたま、当時の担任の方が組合を通じての知り合いだったので、彼のことは少し聞いていました。

今回の作文で改めて、彼(当時小 3 だったお兄さんもおそらく同様)の体験の重さと願いに触れることができました。

授業に生かしたい命がけの体験

中 1 の数学を教えている私は、中 1 の 3 学期、1 月 17 日前後に、「大震災を数学する」という『課題学習』を行います。震源地からの距離と微動時間の長さを関数で表したり(ここは数学)、地質図を色分けさせたり、学校の場所を点で示させたりします。資料として、当時の警察官の手記や、小学生の作文、各校の避難者の数などを提供します。

普段は、「数学なんか社会の役に立たへん」と豪語する生徒も、この時ばかりは、真剣に作業しています。書かせた感想を教科通信で配ります。今回は、冒頭の作文も紹介しながら(当然匿名ですが)、さらに学習を深めたいと思います。



尚、以前の中 1 の教科書では何と”117”頁で地震の課題学習を設定していました。

P.S. 学習プリントご希望の方はご連絡ください。B4 袋綴形式で 2 枚分です。

壊れた時計は、あの時のまま

大阪に来て6年になる。5時46分で壊れて止まった時計は、まだ机の端に置きある。その時計の針の形はくっきりと頭に記憶され、今も朝夕偶然にその時間を見てしまうと数秒は目が離せない。

震災直後、4日目神戸を離れて大阪へ

あの時、避難した中学校の体育館は、人であふれ、びっしり埋まり、かろうじて子ども達は、寝させたが、大人は膝をかかえて座って寝た。

「このままだとからだがどうかなる。」と心配した主人の兄が車で大阪へ連れていってくれた。年寄った義母が不便な避難生活に倒れたら大変だと思った私たちは、数日間ただで、中学校を出た。

車で数珠つなぎの道をノロノロと8時間位かけて大阪へむかう。途中、道に並ぶ家々が、店が、マンションが傾き壊れ、くずれて道へはみだしている。電柱が倒れて電線がたれさがっている。こっぴり壁が落ちて部屋の中がひっくりかえっているのが見える。ずーと同じような風景が続く。尼崎あたりまで来たとき、唖然とした。それまでの景色が嘘のように唐突に普通なのだ。電気もついている。車もスーと走りだす。かつて、義母たちが住んでいた大阪のマンションがそのままだったので私たち一家と義母の6人がそこに転がりこんだ。

多くの人たちに支えられて

大阪で子どもたちはすぐお友達ができた。学校も特別な事情での仮転入ということで、すぐ手続きをしてくれ、クラスの児童が迎えにきてくれた。着の身着のままで来た私たちに、教科書はもちろんのこと、小学校の制服、習字道具や文房具、体操服など用意してくれた。

震災の体験者というので学校中の話題になった。義母は自分の息子たちが卒業した学校に孫も入ったという事がうれしかったようだ。主人も生まれ育った町であり、同級生も多く、職場も近くて、すぐに落ちついてしまった。

私一人、異邦人の様にこちらになじめないでいた。毎日、義母の友人や親類や近所の人

いろいろお見舞いをもってたずねてくれた。ありがたかった。電話や手紙も来た。

避難所にいた時も多くの人が電車をのりつぎ、徒歩で何時間もかけて大きなリュックを背負ってかけつけてくれた。おにぎりを、水を、薬を、ホカホカカイロを・・・次々もって来てくれた。それ以上に大きな“勇氣”ががんばろうという“元氣”を与えてくれた。飲まず食わずにいた私たちに差し出された一杯の熱いお茶の味は一生忘れないねと義母は涙した。

本当に感謝しつくせない多くの人の支えがあった。

しばらく転出届が出せなかった

下の子は神戸に帰りたいたと何度も言う。

「いつ神戸へ帰るの？」

最初のうちは、すぐに神戸へ帰るつもりで転出届を出さずにいた。毎日、報道されるニュースや震災関連の番組をかじりつくように見ていた。台所で洗い物をしようが、部屋の掃除をしようが「神戸の被災地だより」というアナウンサーの声が聞こえるとテレビの前に飛んでいった。“神戸”という言葉にいちいち反応した。子どもが通っていた小学校の映像が出たり、自分たちの知ってる人が出たりすると大あわてでビデオを撮った。

死んだのは自分達かも…蘇るテレビ映像

あの渦中から出て、私たちは外から傍観する形になった。何時間もとじこめられていた人が救い出されると、よかったと言ひ合ひ、家の下敷きになったり火事でなくなったりしたニュースが流れると泣きそうになった。避難所の生活や仮設住宅に移るお年寄りの姿をテレビで見、震災直後、助かったのに病院などでなくなる人の多さに溜息をついた。

私たちだって、ほんの一時の違ひでああなっていたかもしれない。数センチの差で家具の下敷きにならずにすんだ。裏の家がもたれて来たが一緒に倒れはしなかった。紙一重のきわどきで助かったのだ。私たちは幸せだ。家族を失わなかったもの。6432人の尊い命、その人たちに繋がる数万人の人がつらい思いをしているのだから。人生を無理やり変えさせられたのだから。

私にとって「空白の6年間」

私たちが神戸で借りて住んでいた家も、6月末、シャベルカーが入って数日間で影も形もなくなっていた。

今、そこは駐車場になっている。

丸6年にして、やっとというか、ついにというか神戸に帰る段取りができて、引越しの準備をしている。

自分にとってこの6年は、人生の中で空白だったんじゃないか、ただ家と職場を往復するだけの…。そんな気がする。6年前、無茶苦茶になった家の荷物を整理しながらダンボールに詰めたのが、そのまま、いくつも積んだままになっている。心のどこかにもう一度神戸に戻りたい。そんな気持ちが残っていたのだと思う。

「地震さえなかったら…」といっていた義母も亡くなり…

大阪にいた間に、下の子は何度か入院を繰り返した。父がなくなり義母がなくなり何人かの身近な人がなくなった。義母は、なくなる前に何度か

「神戸にいた時が一番よかったなあ、一番たのしかった。」

と言った。

「地震さえなかったらねえ」

とも。

「地震は公平だが、震災は不公平」

ある雑誌に載っていた文を思い出した。“地震と震災とは違う。地震は瞬時に終るが、震災はその直後から始まりいつまで続くかわからない。地震は大地の上に乗っているものを公平に揺さぶるが震災がもたらす結果は不公平だ”新聞や雑誌などの記事でも、私など比べものにならないほど、大変な経験をした人がたくさんいる。

まだ震災は続いていると思う。

過去のことで忘れ去ってはいけな。と思う。

2001年、世紀の変わり目の年に新しい出発ができることに感謝しつつ“”。

生活基盤を失い、急激な環境の変化に加え、通勤するルートの確保もままならず、精神的におちこんでいた私は、立ち直れない気がして仕事もやめようかと思った。職場の人が

「みんな大変な時なんですから、まず自分の生活を立てなおしてからでもいいんじゃないですか。あせらんでも。やめるのはいつでもできますよ。とことんどうしようもなくなってからだって遅くないと思いますよ。ここのことはまかせてください。被害の少なかった者がしますから。」

と言ってくれた。そのお言葉に励まされ、心から感謝した。そして、あまえさせてもらった。2月はほとんど職場に行っていない。

切断された電車がやっと復旧した頃、職場も平常にもどりつつあった。日によっては片道4時間くらいかかることもあったが、徐々に慣れ、家と職場と病院とを三角形に行動する日が続いた。夜9時頃に帰宅する毎日だった。

神戸の復興を見ながら通勤「神戸が好き」の気持ちが伝わって

神戸の街も少しずつ少しずつ復興していった。駅の周り、瓦礫がとりのぞかれ、壊れた建物も解体されていった。

普通の町から壊れた街へ行き来する時、無残さが増幅されるような複雑な気持ちも少しずつ消えていった。

大阪から通勤するJRの窓から山側に中学校と並んで子どもの通っていた小学校が見える。本を読んでも、居眠りしていても、そのあたりがくると、つい目をやってしまう。あの白い船を思わせる丸い窓のついた校舎が、解体されたのはいつだったろう。校庭の青いテントがなくなったのはいつごろだったろう。校庭に走りまわる子どもたちが見える。校舎に大きく掲げられたメッセージ、“元氣をありがとう”胸が熱くなった。その言葉を読むと元氣がわいた。みんな、がんばってる。みんな神戸の自分たちの街が好きなんだと…



神戸で大地震がおこる可能性について、研究者が警告を出していたのにそれが市民や行政に伝わらなかった。その背景に地震や地質をきちんと教えてこなかった学校での理科教育の欠陥があった。兵庫県南部地震は、六甲変動のひとつとしておこるべくしておこった自然現象であった。自然の論理と人間の論理のギャップを知ること、地域に根ざし、地域の大地を教材とし、地域の大地の成り立ちを学ぶ科学教育が求められている。科学を学ぶ意味と楽しさは、科学の成果を豊かに生きるための武器とする市民の権利を保障することにあり、また、自然と人間との関係を問い続けることにある。

六甲山地と大阪湾の風景

教室の窓のむこうには須磨の街並みをへだてて大阪湾が広がる。北は校庭の背後に六甲山地の一部である須磨アルプスの山がせまっている。東のむきの窓からみると山と街がとけあって海にいたる神戸の美しい風景が展開する。(図1)

4月から勤務することになった飛松中学校の教室からみえる風景である。

この風景をつくってきたのは、過去およそ100万年にわたる(そしていまも続いている)大地の変動であった。

六甲の山々は、過去にたびたび大地震をおこしながら高くなってきたし、大阪湾は沈んできたのだ。その山は一方で崖くずれをおこし、土石流をはきだしながら削られてきた山でもある。その土砂を受け止めたのが大阪湾であり、大阪層群と呼ばれる地層はその歴史を記録にとどめている。

大地の凸凹を大きくする地殻変動のひとつが地震である。逆に、大地の凸凹をならし、平坦化しようとする水のはたらきが浸食・運搬・堆積の過程である。この対立する大地の動きのせめぎあいによって、この大地がつくられ、この風景がつくられた。

このような自然の法則的な動きは長い年月をかけてゆっくりと私たちにすばらしい大地を用意する。自然の論理でいえばありふれた、ささやかな動きが、人間にとっては突然の、とてつもない大災害にむすびつくことがある。その一つが兵庫県南部地震という自然現象であり、阪神・淡路大震災という社会現象であった。

決して、想像を絶するものではなかった”ありふれた大地震”(マグニチュードM7.2)が、戦後最大級の被害の大震災にむすびついた背景に、”神戸では(近畿では)大地震がおこらない”という思いこみが広く根づいていたことがある。六甲山と大阪湾の風景が大地震の可能性と結びついていなかったのである。

おこるべくして起こった大地震と市民意識とのギャップ

1995年兵庫県南部地震は神戸市民にとって文字どおり“寝耳に水”の大地震だった。

神戸市民で”大地震が起こる可能性がある”と思っていた人はほとんどいなかった。”近畿地方では大地震はおこらない”と信じていたという人も少なくないが、”地震のことなど考えたこともなかった”という人が多かった。一部には”地震が起こるかもしれない”と思っていた”人もいないわけではないが、活断層の存在などと結びつけてそう思っていたわけではなかった。ばくぜんとそう思って

など考えたこともなかった”という人が多かった。一部には”地震が起こるかもしれない”と思っていた”人もいないわけではないが、活断層の存在などと結びつけてそう思っていたわけではなかった。ばくぜんとそう思っていたにすぎなかった。なかには”確かに学校で先生に神戸では大きな地震は起こらないと教えてもらった”という人までいる。

ばくぜんとした思いが、思いこみにつながり、伝聞によって拡大され、やがて定着し、人々の意識の中に根づいていったようすが想像される。

“地震・雷・火・おやじ”と恐いもののトップに地震を挙げている日本人の伝統的な”防災言い伝え”は、現代では風化していた。このような言い伝えや文化の影響が薄れる中では、意識された教育を受けることがなければ、人々はふつう、自分が生きてきた数十年の生活経験から導かれた考えをもち、判断をし、行動パターンを決定するであろう。

近畿地方とその周辺では1961年の北米濃地震(M7.0、死者8人)以来30年以上もの間、大きな地震は起こっていなかった。それ以前には西日本で大地震が頻発した時期があった。鳥取地震(1943年、M7.2)、東南海地震(1944年、M7.9)、南海地震(1946年、M8.0)などであるが、戦争とその直後の混乱の中でそれどころではなかった。繰り返す地震の活動期と静穏期のなかで、つかの間の静穏期のあいだに、人々の意識から地震が消え、”近畿で大地震がおこらない”との思いこみが広がってしまうのも当然のことであったかもしれない。

ところで地質学者や地震学者は決してそうはいっていなかった。

神戸市は1972年に”神戸市における地震対策”調査を大阪市立大学の笠間太郎を代表とした研究者に委託し、2年後の1974年、その調査報告は”神戸と地震”という冊子にまとめられ神戸市に提出された。調査報告は”神戸市周辺地域は、活断層とよばれる新しい断層系が複雑に走っており、これらと地震との関連が、他都市の地震対策と異なる注目点となる”とのべ、活断層は”有史時代の記録こそ少ないが、長い地質時代において地震が

繰り返して発生した場所の証拠”と断言し、最後に”いつか大地震が起こるとして、地震対策を考えなければならない”と結論付けられている。また”将来、都市直下型の大震災が発生する可能性はあり、そのときには断層付近で亀裂・変位が起こり、壊滅的な被害を受けることは間違いない”とも書かれている。

報告の中には微妙ないまわしながら”神戸での過去の最大の地震震度は5”との記述があるいっぽうで、震度が6~7にもなる可能性にふれていないなど”時代的な制約”があったことは事実である。しかし、当時、明快率直に、わかりやすく大地震の可能性を指摘していたことは驚くべきことである。ここまで書くには相当の勇気が必要だったことは十分に想像できる。

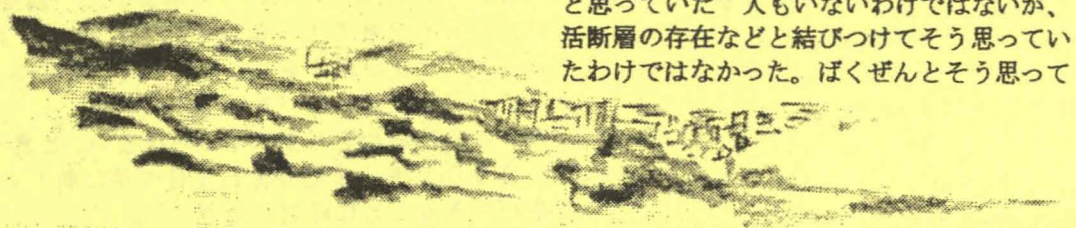
この報告書を受けて”神戸新聞”は1974年6月に”神戸にも直下地震の恐れ”と夕刊のトップに9段記事を書いている。しかし市民の間では、それは大きな持続的な話題にはならなかった。その後も”兵庫県震災対策調査報告書”(1979年)“地域地質研究報告・神戸地域の地質”(1983年)などでも同様の指摘がされている。

“神戸地域の地質”は通産省の研究機関でもある地質調査所が発行するいわば公式文書ともいえるものであり、その中に”神戸市周辺においても今後大地震が発生する可能性は十分にある”とし、”壊滅的な被害を受ける確率は大きい”と断言するにあたっては、執筆者や担当者はかなりの苦勞と努力をしたという(当時、地質調査所の担当者だった服部仁氏の私信)。

このような警告にもかかわらず”大地震がおこらない”という思いこみを拡大していった市民の意識とのギャップはなぜ生じたのだろうか。そこには市民の地震についての基礎学力のなさがあった。その大きな溝をつくった要因の一つは、小中学校・高等学校における理科教育の不十分さであり、欠陥であった。

(次回予告)

「大地のことを教えてこなかった理科教育」



(図1) 須磨区一の谷からみた六甲山地と大阪湾。いくつもの活断層が存在し、大地震を繰り返しながら山地が成長し、海沿いに細い平野部が生まれた。この大阪湾から、市街地、六甲山地にわたる一帯は、日本有数の活断層地帯であることが以前から明らかにされていた。